私は変温動物

山田詠美

講談

私は変温動物
山田詠美
© Eimi Yamada 1991

1991年3月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 東京(03)3945-1111(大代表)
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-184875-5

講談社文庫

私は変温動物

山田詠美

講談社

目次・私は変温動物

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

I

よい小説……13
美味しいもの……16
あの男のあの手……20
「良い先生」と「悪い先生」……25
恋はプラトニック・セックス……29
マイルスに伴う両方のコンプレックスについて……34
必然性というお言葉……38
わたしの東京……43

正しいお母さん……46
作家がお呼び……49
おとうさんといっしょ……52
快食快眠快便……56
「気の狂った犬」……58
ビギン・ザ・ビギン……61
私は変温動物……65
近頃の困りもの①……70
近頃の困りもの②……74
近頃の困りもの③……78
近頃の困りもの④……83

隣の読書人……88
恐怖のソウルミュージックマニア……91
あなたにFUCKIN' CRAZY……93
ロン・カーター……95
私が最も大切にする条件とは？……98

II

深夜の赤坂……107
私の読書日記①……115
私の読書日記②……118
酒中日記……121

「平凡パンチ」に殴り込むの記……127

III

酒とバラの日々（ソウルミュージック篇）……153
酒とバラの日々（ディスコ篇）……165
酒とバラの日々（暗い過去篇）……177
フィッシュフライに行こう……189
プロフェッショナル　イーター……196
おはしでメイク　ミー　カム……203
あとがき……210

私は変温動物

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

I

よい小説

第一作目の『ベッドタイムアイズ』の反響が予想以上に大きかったので、私は驚いて久し振りに自分の作品を読み返すという恥ずかしい事をやってしまった。この処女作は一年程前に書かれたもので、もうとうに私の手を離れているし、つき放して読む事も可能だろうと思ったのだ。

この作品に関しては、あまりにもいろいろな意見があったし、マスコミにも騒がれたのだが、他人が書いたものとして冷静に読んでみると、なかなか悪くない。自惚れたりするのではなく、一つの小説として読んだ場合に、である。私は何故か、とてもせつなくなった。せつない恋愛小説はとてもよいものである。

私はいつも本を読むとき、それを大切にしている。訳が解らないが、少しせつなくなったり、甘い悲しい気持ちになったりするのは誰でもある事だと思う。そして、それは少し

困難な事でもあると思う。大きな悲しみやとてつもなく幸福という感情は、物理的な事件によって意外と容易(たやす)く味わえるものだからである。なんとなくせつない、おかしくもないのに笑いがこみあげるという感じ方は、感性を退化させると出来ないものだと思う。そして、感性の退化した小説は、人間をそういう気持ちにさせることが出来ない。

私の小説を読んで、これはボールドウィンの真似であると言った作家がいるそうである。その人は私の悪口を言ったつもりらしいが、私は嬉しくなった。それは私がボールドウィンを神様のように思っているからである。私は彼の短編小説を読んで、知らないうちに泣いていた事がある。どうして泣いたのかと理由を考えたのだが、よく解らない。きっとよい小説なのだろう。

ボールドウィンの小説と私の小説は内容的にも表現の仕方もまったく別である。似ていると言った作家はきっとボールドウィンの小説を深く読みこなさなかったのだろう。或いは、私はボールドウィンが好き、という記事を読んで、それが潜在意識の中にあったのだろう。黒人と異人種という設定に似たところがあるかもしれないが。でなかったら、彼もボールドウィンを読んでせつなくなった事があるのかもしれない。人をせつなくする感性というのは根本のところで少し似ているものである。

以前、田中小実昌さんの短編を読んだ時も、私は少しせつなくなった。日本にもよい小説が沢山あるのだなあと実感するのは、こういう気持ちを味わった時である。

先日、河出書房新社を訪ねた時、私は初めて読者カードを見せていただいた。あまりの膨大な量に私は感動した。それにもまして、私を感動させたのは二十代の女性の素直な言葉だった。読み終えてから訳もなく声を上げて泣いてしまいました、というようなのが多かった。本を読むこと、そして、それに感動するということは、こういう気持ちが原点なのだと思う。マスコミの意地悪や批評家の鋭い眼よりも私の気を引き締めたのは、体から出て来る言葉を素直に綴った読者の葉書だった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com